今昔物語 第31話

「東大寺」刻印平瓦

（北新町遺跡出土）

北新町遺跡の第Ⅲ期調査では、「東大寺」の刻印の入った平瓦が1点出土しています。この瓦は、平安時代末期（一一八〇年）に平重衡の南都攻めにより焼失した東大寺再建に関連して、鎌倉時代初期に、岡山県瀬戸町にある万富瓦窯で製作されたものです。この瓦窯の操業には、当時東大寺再建のため大勧進職に任ぜられた僧重源が深く関与していたとされています。同調査においては、このほかにも刻印はないものの、かわらの凸面に施されたひし形のタタキメの文様が酷似する平瓦の破片が、数点出土しています。

岡山から東大寺までのかわらの輸送は、瀬戸内海から淀川の水運を利用した経路が考えられていますが、それでは北新町遺跡で東大寺瓦が出土した理由は何でしょうか。

北新町遺跡は河内平野の北東部に位置し、当時は深野池が遺跡のすぐ西方にありました。深野池は寝屋川を通じて西流し、渡辺津（天満付近）のあった淀川河口へ通じていたので、船によって北新町へ来ることは可能であったはずです。また、北新町からは清滝峠越えで木津に行くことが出来ます。しかし、かわらの輸送の主要経路は、淀川から木津へ向かうルートであり、北新町を経由するルートは補助的なものと考えられるでしょう。当時は社会的に安定していなかったこともあり北新町ルートを一時的に利用したのではないでしょうか。

いずれにしても、北新町遺跡の調査地には「東大寺」という小字名が残っており、そこから東大寺瓦が出土したことは、当時この地が東大寺との関係が深かったことは事実でしょう。

今昔物語 第32話

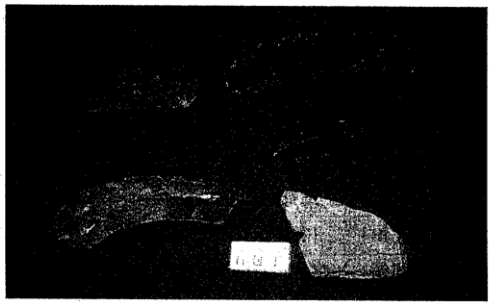
石包丁

中垣内・西諸福遺跡

だ円形または半月形の一側に刃を付けたへん平な磨製石器で、刃と反対側の背の中央付近に、背に平行して2個の小孔（小さい突き抜けた穴）が開けられています。これはひもを取り付けたものと想像され、紐掛孔を通したひもを指に掛けて稲穂を摘み取る道具として使われたものと考えられています。

このような石包丁の多くは粘板岩または砂岩などの岩石で作られており、北九州・中国・四国・近畿地方や岐阜・福島県などの弥生式遺跡から相当数が発見されています。

石包丁は朝鮮半島・中国大陸などの東アジア新石器時代遺跡からも発見されています。

また日本最古の磨製石包丁は、佐賀県菜畑遺跡（唐津市）の2点で、縄文時代晩期の山ノ式に属し（弥生時代とみる考えもあります）、半月形で2個の貫通した小孔があります。

石包丁の生産についての研究が比較的進行しているのは北九州地方と近畿地方中央部です。近畿では奈良県唐古遺跡で前期に属する耳成山産流紋岩製石包丁の製作痕跡が確認されています。